なぜ歴史なのか？

子どもの素朴な疑問から

なぜ歴史なのか？————この問いに答えるのは意外に難しいものです。私が大学で担当している科目は「日本経済史」です。なぜ経済学のなかに歴史を扱う分野があるのか、一般的にはそれほど当たり前のことではないかも知れません。歴史を研究する人の多くは、「なぜ歴史なのか」と問われて、少し狼狽して、しどろもどろの説明に終始した経験を持っているのではないかと思います。歴史を研究するためには、いつの頃からか、言い訳のような説明が求められるようになりました。

歴史を研究するための言い訳は、現代歴史学を代表する歴史家の一人、マルク・ブロック（1886-1944）も

古賀 康士
Koga Yasushi

［研究テーマ］
日本経済史

避けることができませんでした。マルク・ブロックは『王の奇跡』や『封建社会』といった現代歴史学の古典ともいえる著作を書き上げ、「新しい歴史学」の旗手の一人と評価されていた歴史家でしたが、そんな彼も自分の子どもから「パパ、だから歴史が何の役に立つのか説明してよ」と問われて、思わず答えに窮したようです。この子どもからの素朴な問いに答えるため、ブロックは『歴史のための弁明』という本を書くことを構想し、執筆を進めていきます。

もっとも、ブロックの「弁明」は、「歴史が何の役に立つのか」を有用性の観点から答えるものではありませんでした。そうではなく、歴史———あるいは歴史学をすること———そのものの価値を強調しながら、歴史とはどういうものか、そして、歴史家は史料を通じてどのように歴史を創り出すのかという点を反省的に叙述していくという方法をとっていきます。紙幅の関係でその内容をここで詳しく説明する余裕はありませんが、ともあれ、子どもの素朴な問いから１冊の本が書かれようとしたわけです。ここからも「なぜ歴史なのか」という問いが、なかなか一筋縄でいかない、厄介な問題であるということが分かるかと思います。

歴史とは何か？

では、「なぜ歴史なのか」という問題はどのように対応したらいいのでしょうか。この問題を解くためには、そもそも「歴史とは何か」を考える方が、あるいは近道

かも知れません。現代歴史学では、この「歴史とは何か」という問題について次の３点を前提にして考えるのが一般的だと考えられます。

まず第１に、歴史学が対象とする過去は、何か客観的な対象物のような形では存在しないということです。過去というのは、文字通り現在から「過ぎ去った」もののことですから、現在には存在しません。

第２に、私たちは現在は存在しない過去を直接的には認識できないということです。それゆえ、過去の痕跡である史料を介して間接的に捉えることになります。

そして第３に、過去というものが現在の時空に存在しない以上、過去を観察する立脚点は現在の私たちにあるということです。このことは、過去を観察しようとするとき、あるいは過去の痕跡である資料を分析するときに、現在の私たちの先入観や価値観が常に何らかの影響を与えることを意味します。

過去と現在の終わりのない対話

こうした歴史における過去と現在の関係を、イギリスの歴史家のＥ・Ｈ・カー（1892-1982）は次のような印象的な言葉で表現しています。すなわち、「歴史とは、歴史家とその事実のあいだの相互作用の絶えまないプロセスであり、現在と過去のあいだの終わりのない対話なの」であると彼はいいます（『新版　歴史とは何か』岩波書店、2022 年、43 頁）。

ここでＥ・Ｈ・カーが「対話」というメタファー（隠

喩）を歴史に対して使ったことは重要です。一般的に私たちは、対話を通じて他者を理解し、そして他者の存在を通じて、初めて自分自身を客観的に理解することができるようになります。他者とのコミュニケーションなしに、自己を充分に認識することはできません。

この他者と自己の関係性が過去と現在のあいだにも当てはまることに注意をしてください。E・H・カーはこのことを次のように述べています。「過去は現在の光に照らされて初めて知覚できるようになり、現在は過去の光に照らされて初めて十分に理解できるようになるの」だ、と（前掲書 86 頁）。歴史研究という過去と現在の対話を通じて、私たちは過去を理解し、そして私たちの時代をよりよく理解する、と言い換えることができるでしょう。

さて、ここで「なぜ歴史なのか」という冒頭の問いに戻りましょう。あえてマルク・ブロックのように「歴史のための弁明」をするならば、過去の理解があって初めて現在が理解ができるといった点を強調すべきかも知れません。経済史に関していえば、現代のさまざまな経済システムをよりよく理解するための「光」が過去にあるともいえるでしょう。とはいえ、これも今の私のしどろもどろの説明に過ぎないのかも知れません。